



いちいち気になるもんですから

中井 浩三

高知大学医学部皮膚科学講座教授

子どものころからそうでした。たとえば $a^2 - b^2 = (a+b)(a-b)$ という因数分解。公式として覚えるように教わりました。それはズルをしているようで、いまだに理解できないというか、納得できません。数学者なら証明できるのかもしれませんが、それはさておき、私はいろいろといちいち気になるもんですから、ものごとを理解するのに時間がかかるようです。ただ、医学部の勉強はあまりに情報量が多いため、理屈を考えずに覚えることで卒業しました。心電図がなぜあんな波形になるのか理解することもなく。

皮膚科医見習いのときも丸暗記でなんとか日々の仕事をこなしていました。乾癬やアトピー性皮膚炎の病態は気になるものの、とりあえずステロイドの外用治療をしていました。このままでは自分はただの丸暗記皮膚科医になると思い、大学院に進学しました。さまざまな科学的、かつ論理的な考え方を学ぶ一方で、皮膚科学の進歩により皮膚疾患の病態が明らかになってきたので、私の気になることはずいぶん減りました。まだまだ気になることは多いのですが、少しすっきりした気持ちで診療できるようになりました。

自分でもいちいち気になる性分を面倒くさく感じる場合があります。この文章を書くときも、漢字や文章をネットで確認している次第です。カンファレンスでも、気になることを質問したり、簡単な病気であっても教科書やネットでいちいち確認した

りしてしまいます。他の参加者たちにはうんざりされているでしょうが、たまに新しい発見もあるのでご勘弁いただきたいです。

また「治療のパラダイムシフトと患者さんのニーズとベネフィット」といった文章には大混乱です。日本語ではどうなるかなどを考え、やはりネットで確認してしまいます。カルテや紹介状での略語も極力控えてほしいです。知識不足といわれればそうでしょうが、相手に伝える気持ちが感じられません。私自身は診察中、患者さんに説明するとき、できるだけ子どもでもわかるように話すようにしています。私のようにいちいち気にする患者さんには伝わらないでしょうから、講演や学会の発表でも、原稿を読むだけではなく、伝えたいことを子どもでもわかるように話してほしいです。

最近、妻の話が理解しにくくなりました。昔から妻は思いつきでとりとめのない話をするのです。当初はいちいち気になって、ご機嫌を損ねないよう上手にいろいろ聞き返して確認していたのですが、「うん、うん」と適当に相槌を打つので、怒られることが多くなりました。要領がよくなったのか、面倒になったのかはさておき、診療では気をつけるようにしています。